Ⅰ　特集　新型感染症の拡大と学校教育の現在

『夜と霧』に学ぶ

明治大学教育会長　田中　徹太郎

硬式野球部員・ＯＢの皆様へ

コロナ禍の影響で部員の皆さんは、甲子園大会がなくなり、とても悔しい思いでいっぱいでしょう。残念でしたが、しかし、賢明な諸君は、すでに新たな照準を合わせたと思います。ＯＢの皆様も経済の二番底、感染第二波等の先行不透明さへの準備に相対峙されておられることでしょう。下記の文章は、第２次世界大戦中ドイツの強制収容所に収容されたユダヤ人精神科医の著作『夜と霧』をテーマとした内容です。想像を絶する凄まじい環境の中で、多くの人々がガス室に送られ、また、伝染病、栄養失調や自殺でなくなりました。この状況下で、獣性に身を任せる人がいる反面、人の尊さを保ち続ける人々も多く存在したのです。フランクルもその一人でした。彼は、収容所の中で絶望し、自暴自棄になった人々に語りかけ、自らも人生を賭けた決断をしたのです。この文章を通じて皆様にエールを送ります。フレ！フレ！明治！頑張れ！頑張れ！野球部！

人が、予測し難いことに耐えうる力は、どこから発現しうるのであろうか？
フランクルの『夜と霧』より考察してみたい。ヴィクトール・E・フランクルは、強制収容所に収容される前、ウィーン大学医学部精神科教授として、多くのスキルを構築した専門家であり、脳外科医としても一流の評価を得ていた。強制収容所（テレージェンシュタット・アウシュビッツ・テュルクハム）の体験より深く洞察されたこの著作は、世界で 900 万部以上売れ、現在も多くの人々に読まれ続けている。

「・・・飢えかけた被収容者がジャガイモ倉庫に忍び込み、数キロのジャガイモを盗むという事件が起こった。侵入は露見し、被収容者たちは、侵入者が誰か知っていた。収容所当局は、この事をどこからか聞き及び、違反者の引き渡しを要求してきた。これを拒めば、収容所の全員に一日の絶食を課すという。勿論、2500 名の仲間は、一人を絞首台に委ねるよりは断食の方がましだと判断した。」（同書 P. 135～P. 136）

その日の夕方の皆の気分は、停電も重なり最悪だった。居住棟の班長は、賢明な男で、皆に短い話をした。ここ数日で病死し自殺した仲間の本当の原因は、自己放棄だと思う。フランクル、どうしたらこの事を防げるのか教えてくれ。

フランクルは、静かに語った。この収容所で、発疹チフスが広まり、我々の生存率は５％に過ぎない（現実の直視）。でも、未来のことは誰にもわからないし、次の瞬間大きなチャンスが前触れもなくやってくる事を私達はよく知っている（意志ある楽観）。私達が過去の充実した生活で、豊かな経験により実現し、心の宝物としている事は、誰も奪えないのだ。

過去は、生きる源泉である（現在を照らす過去）。仕事や美、芸術等、生を充実させる機会が皆無の収容所でも、その生には意味がある。人間の生は、どんな状況でも意味がある。存在する事の無限の意味は、苦と死をも含む（価値と意味）。この状況を直視し、意気消沈しない。私達の戦いが楽観を許さないことは、人であり続ける戦いの意味や尊さをいささかも貶めるものではない、勇気を持ち続けてほしい（生き抜き戦う意志）。フランクルの仲間の一人は、自分が苦しみ、死ぬなら、代わりに愛する人間には苦しみに満ちた死を免れさせて欲しいと天に誓約した。どれほど過酷な状況にあっても人の役にたつことを放棄しないと（他者への献身・人の使命）。彼が語り終わると、居住棟の梁に電球が一つ灯った。すると、涙を浮かべて、礼を言おうとよろめき寄ってくるボロボロの仲間の姿が見えた。

医師でもあるフランクルは、「病人収容所」へ患者を移送するメンバーに選ばれていた。これは「ガス室行き」を意味すると考えられていた。医長は、彼の身を案じ、取り下げを耳打ちした。彼の答えは、ＮＯ。医長の眼差しにふと同情の光が宿った。翌日、出発した先は「ガス室」でなく本当に「病院収容所」であった。到着後、彼にやがて脱走するチャンスが巡ってきた。彼の脱走を感じ取った同郷の発疹チフスの重症者が「やっぱり逃げるのか？」と絶望しきった眼差しを向けた。やましさという感情が爆裂した。人生は私に何を求めているのか？ 私がどうしたいかより！ 彼は、チフス患者と共に病院に残った（人生の意味：人生からの課題・使命＞私が望むもの）。

「ある夕べ、私たちが労働で死ぬほど疲れて、スープの椀を手に、居住棟のむき出しの土の床にへたり込んでいた時に、突然、仲間が飛び込んで、疲れていようが寒かろうが、とにかく点呼場に出て来いと急き立てた。太陽が沈んでいくさまを見逃させまいという、ただそれだけのために。そして私たちは、暗く燃え上がる雲に覆われた西の空を眺め、地平線いっぱいに鉄色から血のように輝く赤まで、この世のものと思えない色合いで絶えず様々に幻影的な形を変えていく雲を眺めた。その下には、それとは対照的に、収容所の殺伐とした灰色の棟の群れとぬかるんだ点呼場が広がり、水たまりは燃えるような天空を映していた。

私達は数分間、言葉もなく心を奪われていたが、誰かが言った。

世界はどうしてこんなに美しいんだ。」（同書 P. 65～P. 66）

ヒムラーは、獣性に身を委ね、第２次世界大戦中に 2000 万人もの人々を殺戮した。

フランクルは、人間の尊厳を選んだ。

人間の生きる意味とは何か？ 人生から我々は何を求められているのか？ 過酷な運命でも、それを受け入れバネにするには？ フランクルは、今私達に問いかけている。

※この文章は、元勤務校（約 40 年在職）の 2020 年硬式野球部ＯＢ会会報７月号に掲載されたものである。